



農村青年集団の展開過程

著者	佐藤 守
号	11
発行年	1971
URL	http://hdl.handle.net/10097/14952

佐藤 守
さ と う ま も る

学位の種類 教育学博士

学位記番号 教 第 11 号

学位授与年月日 昭和 47 年 3 月 8 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 農村青年集団の展開過程

論文審査委員 (主査)

教授 竹 内 利 美

教授 佐々木 徹 郎

助教授 塚 本 哲 人

論文内容の要旨

この研究は、幕末から明治前期にかけて日本の農山漁村に広範に存在していた若者組が、その後の公的社会諸制度の改革や社会教育政策に対応して、いかにして青年団(会)に再編成されていったかを、主として村落の段階で実証的に分析したものである。

序章においては、村落における青年集団の研究視点が明らかにされている。日本における青年集団の原初的形態は、藩政期の各村落に広範に存在していた若者組である。たとえば、東北農村における若勢組、契約組、伊豆漁村の若衆組、鹿児島、熊本両県下における二歳組などの名称をもって、それぞれの村落の歴史的特殊条件に即して、その構造や機能に多様性が認められる。そして若者組は、自給自足的過小農生産のもとにおかれた村落共同体内における年齢階梯集団の一環として一般的に理解されている。明治期に入って近代的な地方自治制度が整備されていくにしたがい村落共同体は次第に弛緩し、したがって村落の青年を網羅的に組織してきた若者組もその体質改善を迫られることになっていく。特に明治後期以降、若者組を解体して青年団の組織化が行政的に推進されていくことになって。このことからわかるように、若者組から青年団への解

体再編成過程は、それぞれの村落における内的特殊条件と、ナショナルなレベルにおける制度的改革ないし経済的変動といった外的一般の諸条件との交錯のもとで分析されていくことが求められている。ついで、研究視点として、それぞれの村落のなかで若者組をさぐりあて、明治前期から中期にかけて、その村落における若者組の原型を設定する。その原型のもつ構造や機能が、その後の社会変動のなかで、どのように変質、再編成されていったかのプロセスが追究されることになる。この場合、若者組をその機能の面から仮説的に祭祀・娯楽集団、生産・生活集団・政治・経済集団といった類型を求め、更には若者組と青年団との関係を断絶型・並列型・包摂型といった諸類型を求めて、事例研究のための作業仮説としている。

第1章における研究対象は、秋田、山形両県下の農山村に広範に分布している若勢組、契約組および新潟県の若衆組である。ここでとりあげられた七事例に共通していえることは、入会権の問題が重要な要因として介在しているということである。入会権の解体、再編成の過程に対応して、それぞれの村落構造は基本的に規定され、したがって青年集団の性格もそれによって変容をうけるというものであった。更には入会林野の問題と深く結びつく地主制や同族集団の諸問題も若者組の変容を追究する場合、どうしても避けてとおることはできない問題として取り上げられている。ついで、若者組から青年団への再編成過程において、両者の相互関係から、並列型、包摂型、包摂・並列型の三つの類型が取り上げられている。

第2章の研究フィールドは伊豆漁村が中心となり、それとの対比において志摩漁村の一事例も取り上げられた。ここでの若者組のもつ特質は、寝宿慣行であるが、しかしその構造、機能は定置網、曳網などを中心とする相対的に大規模な漁業と磯取り、雑小魚などの零細な漁業を中心とする漁村とでは顕著な相違が認められる。たとえば、農漁兼業の漁浦であって、入会林野と地先の海に束縛された強固な什長組や船元支配の村落体制をとる場合には、寝宿は大宿の形態をとり、それに反して近海漁業から遠洋漁業へと展開していく漁業専門化を志向する漁浦においては小宿（仲間宿）の形態をとる模様である。前者においては若者組は村落体制の下部機構として位置づけられ、その共同体の補強に奉仕していくのに対して、後者においては相対的に村落から解放されていく。

第3章の研究対象は鹿児島県下の農山漁村、天草漁村における2歳組、および四国、中国地方における若衆組である。ここでも、それぞれの村落構造のあり方が、2歳組や若衆組の性格を基本的に方向づけていることが認められる。たとえば薩摩藩における2歳組の事例においては、門、方限を社会的基盤にする郷中の存在形態が、また高知県下の佐喜浜若衆組（第3章第7節）においては4宿の存在が、岡山県下の吉川氏青年団（第3章第8節）においては村落における講組のあり方が、それぞれの若者組の組織、機能を決定していくというものであった。更にこのような特色をもつ若者組が青年団への再編成過程において示す形態は、断絶型、連続型の2つの類型

を示すことになる。

終章においては農村青年集団の近代化過程が若者組、青年団、サークルの系列でとらえられ、それぞれの基本的性格が再吟味されている。更に各地方における青年集団とその展開過程の特色が、序章において設定された仮説的類型に基づいて検討されている。要するに村落における青年集団の特性は、各時代における全体社会の政治的性格と村落体制の特殊条件とによって基本的に規定されてきたものといえよう。

論文審査結果の要旨

本論文は明治以降における日本の青年集団の展開過程を実証的に検討し、その歴史的意味を究明しようとしたもので、特に村落社会における伝統的な若者組が、国家主義的理念による育成策によって新しい青年団に変容・再編されて行った過程の分析に視点がおかれている。その前述のおよその構成は次のようである。

序章 一村落における青年集団の変容とその研究方法

第一章 東北・北陸地方における青年集団の変容

- 1) 館合若者共済団（秋田県東由利村）
- 2) 老若団（秋田県東由利村）
- 3) 独青团（秋田県比内町）
- 4) 契約組（山形県飯豊町）
- 5) 筒石・保上青年会（新潟県能生町）
- 6) 東北・北陸地方における青年集団

第二章 東海地方における青年集団の変容

- 1) 戸田若衆組（静岡県戸田村）
- 2) 大薮若衆組（静岡県土肥町）
- 3) 宇久須若衆組（静岡県賀茂村）
- 4) 田子若衆組（静岡県西伊豆町）
- 5) 共導社（静岡県西伊豆町）
- 6) 明倫社、博愛社（静岡県南伊豆町）
- 7) 桃取青年団（三重県鳥羽市）
- 8) 東海地方における青年集団

第三章 西南地方における青年集団の変容

- 1) 竹子共生会（鹿児島県溝辺村）

- 2) 下有川二才青年会（鹿児島県溝辺村）
- 3) 瀬々串二才組（鹿児島県喜入町）
- 4) 城元青年団（鹿児島県大根占町）
- 5) 浅海青年団（熊本県牛深市）
- 6) 魚泊青年団（愛媛県宇和海村）
- 7) 佐喜浜若衆組（高知県室戸市）
- 8) 吉川氏子青年団（岡山県賀陽町）
- 9) 西南地方における青年集団

終章 日本青年集団の近代化過程

- 1) 若者組、青年団、サークル
- 2) 青年集団の地域的類型

以上の章節構成に示されているとおり、本論文では考察の資料をすべてあらたに現地調査によってえられたオリジナルなものにかぎり、しかも個々の村落における事例的な実態分析を主な方法に採用している。序章はそうした扱いに一貫性を与えるため、青年集団の変容過程についての一応の展望と作業仮説を呈示し、かつ個々のモノグラフにおける共通的な分析枠を示して、総括的まとめにそなえている。第一章以下はかなり詳細にわたる個々の事例についての考察で、本論文の主体をなすところである。東北地方の標本として秋田県(3)・山形県(1)・新潟県(1)下に5事例、東海地方の標本として静岡県(6)・三重県(1)下に7事例、西南地方の標本として鹿児島県(4)・熊本県(1)・高知県(1)・愛媛県(1)・岡山県(1)等に計8事例をそれぞれとりあげ、さらに各地方ごとに典型的に整理したまとめを付している。明治以降における青年集団の展開様相は村ごとにかなり個性的で、その存立と変容が基本的には依拠する基礎的な村落集団（部落）の具有する特殊条件に規制されていたことをよく示しているが、反面、地方制度の確立、学校制度の普及、さらには社会教育における青年団育成方策の展開等々、国家的見地からの外的働きかけのままた、ひとしく同じ方向にむけてあらたなる脱皮をとげ、戦後における地域的網羅組織の解体と有志的な学習集団性格への変質を結果しつつあることが、一様に指摘できるとしている。ただし、その展開過程はいちじるしく錯雑しており、地域的にかなりの共通性を示しつつも、基本的には当該村落の社会構造に規制されるところが強く、単純な概括を不可能にしている。著者の関心もまた、主としてはその点におかれ、事例ごとに実態分析を克明に加えつつ、各村落ごとの青年集団の変動様相の個別的解明に多くの力を注ぎ、その点ではすぐれた成果を収めているといえる。しかし、ここにとりあげた諸事例はおおむね辺境地帯の農山漁村であって、明治初期における社会的変動の刺激をいちはやくとらえて、自主的に自己脱皮をとげた青年集団はほとんどふくまれていない。それゆえ、結章における明治期の青年集団一般の展開動向への総括には、かなりの限界がおのずか

ら生じている。著者もその点は充分自覚して、諸事例の概括から、新旧両集団間の連続・断絶、ないしは併存の諸型を剔出し、その変動類型を地域性に即して解明するにとどめている。つまり、研究成果の集積のきわめてもしい分野ゆえ、体系的な全般的まとめを急ぐ困難さを痛感して、新しい事例の追加とその実態分析に努力を集中しており、その面では注目するに足る成果をおさめていると考える。

日本の伝統的青年集団の研究はこれまで主として民俗学の領域でとりあげられてきたが、多くは婚姻習俗や祭祀・芸能集団との関連で問題にされたにとどまり、村落内における年序集団体系の一環として社会学ないしは社会人類学的立場から組織的にあつかわれるようになったのは、近年のことで、しかもまだ充分な体系化はなされていない。一方「大日本青年団史」をはじめ、各地方誌の類に若干通史的な青年団発達史の研究成果もみられるが、学問的な体系化はきわめて未熟であった。さらに戦後の青年学習集団の動きや青年運動の動向についての論述もかなりの数にはのぼるが、いずれも評論的発想を出るものではなく、研究の基礎とするにはきわめて不十分である。教育社会学的立場において、伝統的な青年集団から自主的な学習集団ないしは実践的運動体への展開過程を究明することは、きわめて重要な問題点であるが、その前提的条件は今のところきわめて未熟の状態である。本論文はその未開拓の分野に、明確な問題意識のもとに鉤を入れたもので、その意図は大きく評価されてよい。しかも何より基礎的な資料の蒐集と構成に力点をおき、ひろく各地に現地調査をこころみて、未知のしかもきわめて有力な基礎的資料を学界に提供した点は、大きな貢献といえよう。その事例的分析もほぼ適確で、著者の力量をうかがわせるに足るものがある。

ただし、年序集団体系としての分析枠組の構築と、個々の村落集団の構造的把握には若干不十分な点が見られ、したがって村落社会内において伝統的な青年集団の果してきた機能の明確な把握にはかなり不満な点もみられるし、また、青年集団の質的変容過程の解明にも適確さを欠くうらみがある。何より一応、東北・東海・西南といった村落社会の地域的類型を指定したうえで、調査事例の標本選定をおこないつつも、各地区の若者組の集団的特質の類型の把握には、かならずしも成功していない点が、深くおしまれる。未婚青年層で一応完結していた型と、既婚青年層をむしろ主体としていた型の差異は、新しい青年団への展開のうえにもかなり大きな変相を与えているはずであるが、その点はほとんど無視されている。しかし、これらはむしろ今後の研究に期待するのが至当であって、より充実な青年集団の近代的再編過程解明への土台は、本論文においてもかなり用意されているとみとめられる。

以上若干不十分と思われる点はあるが、ともかく新しい研究分野に切りこみ、第一次的な価値ある基礎資料を豊富に学界に提供し、しかも体系的究明への有力な礎石の一つをきずいた意味で、本論文は特にその独創性を大きく評価されてよい。本論文の骨子が「近代日本青年集団史研究」

としてすでに刊行され、かなり学界の注目をあつめているのは、その証拠でもある。よって本論文は教育学博士の学位を与えるに十分なものと認定する。なお、最終試験において、著者は大学院博士課程修了以上の学力を有するものと認められた。

以 上